筑紫女学園大学リポジト

6. Junior college students' views for the children of age 3～5 years

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 博子, HARADA, Hiroko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/709

幼児教育科短大生の子ども観
── 高校生との比較 ──

原　田　博　子

Junior college students' views for the children of age 3～5 years

Hiroko HARADA

本研究は幼児教育科短大生と高校３年生を対象とし，「子ども観」の違いを明らかにすることを目的とした。因子分析の結果，「子ども観」は５因子が抽出され，「活発で純粋無垢な存在」「手がかかる存在」「能力を秘め，可能性のある存在」「貴重な存在」「感情的な存在」と命名した。実際の子どもと接した経験が少ない高校生は「手のかかる存在」だという子ども観を持っているが，実習などの経験を踏まえた短大生はそのイメージは薄れ，子どもから学び，共に育つという「貴重な存在」だと気付いていくということが明らかになった。

問題と目的

『幼稚園教育要領解説』[1]（平成11年６月　文部省）によると幼児期は自然な生活の流れのなかで直接的・具体的な体験を通して人間形成の基礎を培う時期であり，また一人一人の幼児が発達に必要な経験を得られるようになるためには，教師が幼児の発達の実情や生活の流れなどに即して環境を構成し，適切な援助をしていくことが最も大切とされている。また『保育所保育指針』[2]によると保育所は乳幼児が生涯にわたる人間形成の基礎を培う極めて重要な時期にその生活時間の大半を過ごすところであるとされ，保育においては保育士の言動が子どもに大きな影響を与えるため保育士は常に研修などを通して自ら人間性と専門性の向上に努める必要があることや倫理観に裏付けられた知性と技術

を備え，豊かな感性と愛情を持って一人一人の子どもに関わらなければならないとされる。

このように幼稚園教諭・保育士（以下保育者と表現する）の果たす役割は大きく，責任も重大である。またその保育者の保育姿勢（子どもとの関わり方）は保育者それぞれの人生観・子ども観・発達観・保育観・環境観などから成り立っているとされる[3)]。保育を受ける子どもたちは関わりのなかで保育者の保育姿勢の影響を受ける。その保育姿勢のなかでも子どもを「どのような存在とみるか」によって保育者の子どもとの接し方に違いがあらわれるであろう。そして「どのような存在とみるか」は子どもと直接接するという経験によって変化していくものと考えられる。また当幼児教育科は幼稚園教諭・保育士を養成しているが，学生を育てるうえで学生が持つ子ども観を捉えておく必要もあると思われる。

＜子ども観の定義＞

児童観とは「児童をどう理解し，どのような存在とみるかといった児童に対する基本的な考え方および態度」[4)]を言う。しかし，児童とは一般的に出生後から18歳未満を指し，年齢にかなりの幅がある。そこで年齢の幅を狭くし，3～5歳までの子どもを「どのような存在とみるか」という意味で「子ども観」という用語を使用することにした。

＜子ども観の先行研究＞

永澤（1996）[5)]は母親を対象に子ども観と養育態度の関係を分析している。永澤は独自の子ども観尺度を作成し，因子分析の結果から子ども観として「一個の人間」「否定的な存在」「愛しい存在」「親の私物」「不完全な存在」「無知な存在」という6つの因子を見出した。そして平均値の差による検定の結果，子どもの発達年齢によって子ども観に差がないこと，母親の年齢によって子ども観に差があること，子どもの人数によって子ども観に変化があることを明らかにした。また，母親の「子ども観」と養育態度の関係は子どもを「一個の人

間」と捉えている母親は子どもに対して支配的でない態度を示していることや子どもを「否定的な存在」と捉えている母親は子どもに対して拒否的，支配的，不一致な態度を示していることなど母親の養育態度と子ども観には密接な関係があることを明らかにした。

嘉数他（1997）[6]は保育科短大生を対象に子ども観と保育職志望度との関連を分析している。嘉数他は永澤（1996）の子ども観尺度を使用し，因子分析の結果から「いとおしい存在」「個性的存在」「煩わしい存在」「未熟な存在」「親の所有物的存在」「尊敬すべき存在」「教育すべき存在」という7つの因子を見出した。そして保育職志望者・非志望者・無回答（わからない）の3群で分散分析を行っている。その結果，保育職志望群の方が「いとおしい存在」「個性的存在」「未熟な存在」の因子において平均値が高いことを明らかにしている。

島袋他（1998）[7]は保育科短大生を対象に子ども観と保育職志望度・地域特性との関連を分析している。島袋他は永澤（1996）の子ども観尺度と友利（1995）の尺度を加味し，沖縄県特有の項目も追加した子ども観尺度を作成し，価値体系と概念体系という2つの観点で因子分析を行っている。価値体系では「立身出世」「親族主義」「伸び伸びとした存在」「自己制御」という4つの因子を見出し，概念体系では「可能性」「否定的」「あてになる存在」「自立的存在」「個としての存在」「了解可能な存在」という6つの因子を見出している。さらに沖縄県と愛媛県を地域特性とし，保育職志望と子ども観の関連性を検討している。その結果，沖縄県では「否定的な存在」が負の相関関係にあり，保育職志望度が高いほど子どもについて否定的に捉えないということや愛媛県では「立身出世」が有意な正相関にあり，保育職志望度が高いほど子どもに立身出世を願うことが明らかになった。

島田他（1999）[8]は保育科学生を対象に子ども観とライフスタイルの変化について分析している。島田他は永澤（1996）の子ども観尺度に独自の項目を加え子ども観尺度を作成した。さらに飽戸（1987）と山本（1995）を参考にライフスタイル尺度を作成した。因子分析の結果，子ども観として「否定的存在」

「一個の存在」「愛しい存在」「能力ある存在」という4つの因子を見出した。また，ライフスタイル観として「ファッション・トレンド志向」「リーダー志向」「生活享受志向」「他者志向」という4つの因子を見出した。その結果，ライフスタイルと子ども観には関連性がないことが明らかにされた。また，子ども観の変化という観点からライフスタイル・子ども観・影響因子について平均値の差による検定を行っている。その結果，ライフスタイルについては子ども観が大きく変化した群のほうがより達成志向的で，リーダー志向があり，より個性的で自分らしい生き方を探求しようとするライフスタイルを持っていることが明らかにされた。また，子ども観については子ども観が大きく変化した群の方がステレオタイプ的な子ども観を持ってはおらず，子どもの能力に対する尊厳の念を抱いており，子どもを肯定的に理解しようとする特徴を明らかにしている。子ども観の変化に影響を及ぼした要因としては，定量的分析の結果，幼稚園実習の影響が相対的に高いということ，また定性的分析の結果，実習という直接経験が可能な場での子どもとの接触や観察を通して，子どもに対する見方や捉え方を変えていくことが明らかにされた。

＜目的＞

様々な先行研究において，幼児教育科短大生の子ども観はその短大生の保育職志望度によって差があること，また実習によって変化していくことなどが明らかにされているが，子ども観が実際どのように変わっていくかはまだ追求されていない。そこで本研究では幼児教育科短大生の子ども観が実習など子どもと直接接する保育の経験によって，どのような点が変化し，どのような点が変化をしないのかというところを明らかにすることを目的とする。なお，比較検討するにあたって，幼児教育科への進学希望しており，保育職志望していることから保育者を目指すという点で短大生と共通の意識を持つと思われる高校生を選んだ。

方　法

── 質問紙作成のための予備調査 ──

＜対象者＞

①　乳幼児期の子どもを持つ親　　13名

②　乳幼児期のクラスを持つ保育士　　7名

③　1999年度幼児教育科2年生　　11名

＜属性＞

①　男性5名女性8名（事務職11名　教職2名）

②　男性2名女性5名（現職7名）

③　女性11名

＜手続き＞

①　T校職員に質問紙を直接手渡し，1週間後直接受け取った。

②　F市内の保育園2園へ質問紙と回収用の封筒を送り，郵送にて返却してもらった。

③　学生へ直接質問紙を手渡し，その場で回答を求めた

＜調査時期＞

①～③　1999年5月

＜調査内容＞

・子どもに絶対すべきこと

・子どもにしたほうがよいこと

・子どもにしなくてもいいこと

・子どもにしないほうがいいこと

・子どもに絶対にしてはいけないこと

以上の5点について‘子どもはどのようなものだから’という理由をつけて自由記述で回答を求めた。

その回答と永澤（1996）の子ども観尺度の項目内容を参考にし，以下の33項目を質問項目として作成した。

・子どもは無邪気である
・子どもは思ってもみない行動をとる
・子どもは保育者を成長させる
・子どもはわがままだ
・子どもはかけがえのないものだ
・子どもは環境によって影響をうけやすい
・子どもはおもしろい
・子どもは身体を動かすことが好きである
・子どもの性格は生まれつきである
・子どもは一緒にいる人を元気づけることがある
・子どもはうるさい
・子どもはすぐに母親を恋しがる
・子どもはそれぞれの個性をもっている
・子どもは一人では何もできない
・子どもは感性が豊かである
・子どもはよく泣く
・子どもは知らないことが多い
・子どもは好奇心が旺盛である
・子どもは素直である
・子どもは何に対して一生懸命である
・子どもは人間としては未完成である
・子どもは元気がいい（活発である）
・子どもは人を疑うことを知らない
・子どもはよくけんかをする

・子どもは大人が気付いていないことや見えないものをみている
・子どもは発想が豊かである
・子どもは大人のいうことをきかない
・子どもは喜怒哀楽が激しい
・子どもはそれぞれの世界を持っている
・子どもは手間がかかる
・子どもはあらゆる可能性をもっている
・子どもは純粋である
・子どもは思ったことをストレートに表現する

本調査

＜対象者＞

表1　対象者数

		学 年	人 数
短大生	2000年度幼児教育科	2年生	115名
高校生	①　福岡市内T高校生	3年生	22名
	②　福岡市内F高校生	3年生	5名
	③　その他の高校生	3年生	120名
	①～③の合計		147名

＜属性＞

表2　対象者の属性

短大生	専門職（幼稚園教諭　保育士）希望者 保育実習2回　教育実習1回　の経験がある
高校生	①　幼児教育科への進学希望者
	②　幼児教育科への進学希望者
	③　T校のオープンキャンパスに来校した幼児教育科への進学希望者
	①～③　保育の経験はない

＜手続き＞

（短大生）

授業終了後，研究の目的，データの処理方法などを説明後，一斉に質問紙を配布し，その場で記入後，回収した。

（高校生）

① 授業終了後，研究の目的，データの処理方法などを説明後，一斉に質問紙を配布し，その場で記入後，回収した。

② 授業終了後，研究の目的，データの処理方法などを説明後，一斉に質問紙を配布し，その場で記入後，回収した。

③ 模擬授業を受講するために待機している高校生に研究の目的，方法，データの処理方法などを説明し，同意を得た高校生のみに質問紙を手渡し，その場で記入後，回収した。

＜回収率＞

（短大生）　100％

（高校生）①～③　100％

＜調査時期＞

（短大生）　2000年　7月下旬

（高校生）　①　2000年　8月下旬

②　2000年　8月下旬

③　2000年　7月下旬

＜調査内容＞

予備調査で作成した質問紙を使用し，「全くそう思わない」を1「全くそう思う」を6とする6段階の評定尺度を設けて質問紙を作成し，回答を求めた。

＜分析に使用したソフト＞

SPSS10.0J

結果

＜因子分析の妥当性＞

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は 0.823 であった。

＜因子分析に基づく項目の選定＞

全項目において，回答の分布に極端な偏りが見られなかったため，「子ども観」33項目について，主因子解プロマックス回転による因子分析を行い，5因子を抽出した。なお因子負荷量が 0.35 以上となるような項目を抽出した。

＜第1因子＞

・子どもはおもしろい
・子どもは素直である
・子どもは無邪気である
・子どもは純粋である
・子どもは何に対しても一生懸命である
・子どもは思ったことをストレートに表現する
・子どもは元気がいい（活発である）
・子どもはかけがえのないものだ
・子どもは疑うことを知らない
・子どもは人を疑うことを知らない
・子どもは感性が豊かである
・子どもは身体を動かすことが好きである

以上の11項目に因子負荷量が高かった。

肯定的な子どもの特徴を表わすものとして「活発で純粋な存在」と命名した。

＜第２因子＞

・子どもは手間がかかる

・子どもはうるさい

・子どもはよく泣く

・子どもはわがままだ

・子どもは知らないことが多い

・子どもはすぐに母親を恋しがる

・子どもは大人のいうことをきかない

・子どもは一人では何もできない

以上の８項目に因子負荷量が高かった。

否定的な子どもの特徴や未熟さを表わすものとして「手がかかる存在」と命名した。

＜第３因子＞

・子どもはあらゆる可能性をもっている

・子どもは発想が豊かである

・子どもは好奇心が旺盛である

・子どもは子どもなりの世界を持っている

以上の４項目に因子負荷量が高かった。

これから発達するであろう子どもの能力や可能性などへの期待を表わすものとして「能力を秘め，可能性ある存在」と命名した。

＜第４因子＞

・子どもは大人が気付いていないことや見えないものをみている

・子どもは環境によって影響を受けやすい

・子どもはそれぞれの個性をもっている

・子どもは思ってもみない行動をとる

・子どもは保育士や幼稚園教諭を成長させる

以上の5項目に因子負荷量が高かった。

子どもそれぞれが個性をもち，大人とは違う感性を認めるものとして「貴重な存在」と命名した。

＜第5因子＞

・子どもは喜怒哀楽が激しい

・子どもはよくけんかをする

以上の2項目に因子負荷量が高かった。

子どもの感情コントロールの未熟さを表わすものとして「感情的な存在」と命名した。

表3　子ども観因子分析結果

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
Q 7 子どもはおもしろい	0.723	0.023	−0.252	0.272	−0.010	0.504
Q19 子どもは素直である	0.676	−0.128	0.039	−0.020	0.039	0.505
Q 1 子どもは無邪気である	0.634	0.036	−0.139	0.062	0.022	0.360
Q32 子どもは純粋である	0.623	−0.024	0.023	−0.162	−0.060	0.552
Q20 子どもは何に対しても一生懸命である	0.568	−0.064	0.020	0.002	−0.026	0.383
Q33 子どもは思ったことをストレートに表現する	0.545	−0.022	−0.068	0.140	0.018	0.359
Q22 子どもは元気がいい（活発である）	0.499	−0.012	0.200	−0.060	0.014	0.441
Q 5 子どもはかけがえのないものだ	0.463	−0.025	−0.029	0.203	−0.079	0.389
Q23 子どもは人を疑うことを知らない	0.450	0.176	0.108	−0.263	0.100	0.384
Q15 子どもは感性が豊かである	0.387	0.068	0.238	0.165	−0.074	0.450
Q 8 子どもは身体を動かすことが好きである	0.385	0.077	0.351	−0.176	−0.023	0.439
Q30 子どもは手間がかかる	−0.232	0.668	0.194	−0.080	−0.132	0.410
Q11 子どもはうるさい	−0.085	0.666	−0.125	0.071	0.006	0.431
Q16 子どもはよく泣く	2.092	0.648	0.101	−0.053	0.017	0.483
Q 4 子どもはわがままだ	−0.074	0.566	−0.084	0.334	0.105	0.362
Q17 子どもは知らないことが多い	0.199	0.438	−0.053	−0.115	0.177	0.361
Q12 子どもはすぐに母親を恋しがる	0.088	0.432	0.120	0.077	−0.077	0.360
Q27 子どもは大人のいうことをきかない	−0.092	0.422	−0.041	0.022	0.266	0.330

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
Q14 子どもは一人では何もできない	0.157	0.413	−0.174	−0.222	0.076	0.329
Q31 子どもはあらゆる可能性をもっている	0.010	0.025	0.638	−0.062	−0.033	0.377
Q26 子どもは発想が豊かである	0.135	−0.146	0.594	0.134	0.141	0.496
Q18 子どもは好奇心が旺盛である	0.149	0.053	0.575	−0.001	0.036	0.454
Q29 子どもは子どもなりの世界を持っている	−0.051	−0.023	0.360	0.339	0.301	0.335
Q25 子どもは大人が気付いていないことや見えないものをみている	−0.132	−0.062	0.245	0.454	0.152	0.319
Q 6 子どもは環境によって影響をうけやすい	0.024	−0.062	−0.087	0.436	0.228	0.176
Q13 子どもはそれぞれの個性をもっている	0.144	0.107	0.194	44	−0.042	0.355
Q 2 子どもは思ってもみない行動をとる	0.050	−0.009	−0.040	0.388	0.188	0.213
Q 3 子どもは保育士や幼稚園教諭を成長させる	0.170	0.065	0.047	0.377	46	0.263
Q28 子どもは喜怒哀楽が激しい	0.096	0.050	0.232	0.292	0.597	0.369
Q24 子どもはよくけんかをする	−0.027	0.149	−0.051	0.275	0.435	0.278
負荷量平方和	5.002	2.777	4.017	2.245	1.160	

以下ではここで得られた「子ども観」33項目5因子について検討する。
分析にあたっては各因子の項目の合計得点を算出して因子得点とした。
また，各因子が下位尺度を構成し，これを子ども観尺度とした。

＜子ども観尺度の信頼性＞

各因子の信頼性（内部一貫性）を確認するために，上で得られた各因子得ついてクロンバックのα係数を算出した。結果は以下のとおりである。

表4　下位尺度のα係数

下　位　尺　度	項目数	α係数
第1因子 「活発で純粋な存在」	11	0.84
第2因子 「手がかかる存在」	8	0.77
第3因子 「能力を秘め，可能性ある存在」	4	0.70
第4因子 「貴重な存在」	5	0.53
第5因子 「感情的な存在」	2	0.48

＜グループ統計量＞

表５　因子別グループ統計量

		N	平均値	標準偏差	平均値の標準偏差
第１因子 「活発で純粋な存在」	短大生	115	46.53	4.77	0.44
	高校生	147	47.48	6.77	0.56
第２因子 「手がかかる存在」	短大生	115	21.26	6.15	0.57
	高校生	147	23.96	5.23	0.43
第３因子 「能力を秘め，可能性ある存在」	短大生	115	18.12	1.97	0.18
	高校生	147	18.50	1.91	0.16
第４因子 「貴重な存在」	短大生	115	22.96	1.77	0.17
	高校生	147	22.03	2.48	0.20
第５因子 「感情的な存在」	短大生	115	7.13	1.70	0.16
	高校生	147	7.24	1.85	0.15

＜等分散性の検討＞

Ｔ検定を行うにあたって，等分散性を知るために，ルビーンの検定を行った。結果は以下のとおりである。

表６　因子別ルビーンの検定

		F 値	有意確率
第１因子 「活発で純粋な存在」	等分散を仮定する	7.973	0.005
第２因子 「手がかかる存在」	等分散を仮定する	4.029	0.046
第３因子 「能力を秘め，可能性ある存在」	等分散を仮定する	0.227	0.634
第４因子 「貴重な存在」	等分散を仮定する	9.878	0.002
第５因子 「感情的な存在」	等分散を仮定する	0.108	0.743

＜平均値による差の検定＞

「子ども観」の各因子について，幼児教育科短大生と高校生で因子得点の平均値の差による比較を行った。T検定の結果は以下のとおりである。

表7　因子別T検定

	t　値	自由度	有意水準
第1因子 「活発で純粋な存在」	−1.335	257.345	0.183
第2因子 「手がかかる存在」	−3.761	223.769	0.000216
第3因子 「能力を秘め，可能性ある存在」	−1.583	260	0.115
第4因子 「貴重な存在」	3.535	258.109	0.000483
第5因子 「感情的な存在」	−0.485	260	0.628

第1因子　「活発で純粋な存在」

短大生と高校生において平均値による差の検定の結果，差は認められなかった。

第2因子　「手がかかる存在」

短大生と高校生において平均値による差の検定の結果，有意な差が認められ，（t＝−3.761，自由度223.769　P＜.01）高校生の因子得点の方が高かった。

第3因子　「能力を秘め，可能性ある存在」

短大生と高校生において平均値による差の検定の結果，差は認められなかった。

第4因子　「貴重な存在」

短大生と高校生において平均値による差の検定の結果，有意な差が認められ，（t＝3.535，自由度258.109　P＜.01）短大生の因子得点の方が高かった。

第５因子 「感情的な存在」

短大生と高校生において平均値による差の検定の結果，差はみられなかった。

考察

＜妥当性・信頼性の検討＞

因子分析の妥当性についてはKMO（Kaiser-Meyer-Olkin）の標本妥当性の測度が0.823であることから因子分析を行うことの妥当性が認められた。

また，子ども観尺度の信頼性については第４因子「貴重な存在」（５項目）と第５因子「感情的な存在」（２項目）のα係数がそれぞれ0.53と0.48とやや低いが項目数の少なさが影響しているものと考えられる。第１因子「活発で純粋な存在」第２因子「手がかかる存在」第３因子「能力を秘め，可能性のある存在」のα係数はそれぞれ0.84，0.77，0.70と0.70以上を示しており，ほぼ満足できるものであった。

＜短大生と高校生による子ども観の差の検討＞

「活発で純粋な存在」と「能力を秘め，可能性のある存在」に関して短大生と高校生では平均値による差は認められなかった。活発で純粋であることや能力を秘め，可能性ある存在であるという子どもを肯定した思いは保育の経験とは関係がないようである。また，「感情的な存在」も短大生と高校生では平均値による差は認められなかった。子どもは心の動きが表情や行動に表れやすいという特徴を持っている。こうした子どもの特徴も短大生，高校生に共通した子ども観であるようだ。そして，このことも保育の経験とは関係がないようである。

「手がかかる存在」と「貴重な存在」に関してだが，平均値による差は短大生と高校生の間でそれぞれ有意な差があることが示された。今回調査対象とした高校生は幼児教育科短大への進学を希望しており，一般的な高校生に比べ，子どもへの関心は大きいと思われる。しかし，高校生の方が子どもを「手がかかる存在」と捉えており，短大生の方が子どもを「貴重な存在」と捉えている

という結果であった。高校生は保育の経験がなく，５歳以下の子どもをイメージでしか捉えていないのかもしれない。それゆえ，子どもの未熟さや子どもは保護を必要とする存在などを言い表している「手がかかる存在」の平均値が短大生より高かったのではないだろうか。一方短大生の方は実習やゼミ活動など様々な経験により５歳以下の子どもと直接接する経験をしている。高校生がイメージでしか捉えていないのに対して，短大生は直接子どもと接した結果，乳児の時から個性があることや大人とは違う物の見方をすることなどを強く再認識したのではないだろうか。そして実際の関わりの中で子どもとの関係は相互作用だという事を意識し，子どもは保育士をも成長させる「貴重な存在」だということに気付いていったのであろう。星野他（1995）[9]は保育士養成校３校を対象に子ども観の変化に影響を与えた開講科目についての研究をしているが，保育短大生の子ども観・保育者観にもっとも影響を与えた科目は「実習」であった。また，島田他（1999）[8]の研究でも学生の子ども観の変化に及ぼした強い影響要因として「幼稚園実習」が挙げられている。このことからも実習など，子どもと直接接する経験が保育短大生の子ども観に影響していると考えられる。そして，本研究では保育者になることを志望し，子どもへの興味も大きいと考えられる高校生は実際の子どもと接した経験が少ないことから子どもを「手がかかる存在」だと捉えている。しかし，実習など直接子どもと接する経験を通してその子ども観は薄れていき，子どもは共に学び，共に育つという「貴重な存在」であるということに気付いていくということが示唆された。

＜今後の課題＞

今回の研究において調査対象者は幼児教育科への入学を希望している高校生と幼児教育科短大生という横断的研究であり，同じ対象者を追跡していないという限界がある。従って今後は入学した保育短大生の子ども観が実際の２年間を通してどのように変化していったかという縦断的研究を行っていく必要があると考える。

<引用文献・参考文献>

1）『幼稚園教育要領解説』文部省著　1999　株式会社フレーベル館　PP.14-15

2）『ハンディー保育所保育指針』1999　全国社会福祉協議会・全国保育士会　PP.2-3

3）『現代保育用語辞典』1997　岡田他著　株式会社フレーベル館　PP.190

4）『現代保育用語辞典』1997　岡田他著　株式会社フレーベル館　PP.390

5）永澤道代1996「母親の子ども観と養育態度の関係」『追手門学院大学心理学論集』第4号　PP.11-21

6）嘉数朝子1997「大学生の“子ども観”に関する研究 ── 保育職志望度との関連で ── 」『琉球大学教育学部紀要』第51集　PP.207-213

7）島袋恒男他1998「女子短大生の“子ども観”に関する研究II ── 保育職志望度と地域特性との関連で ── 」『琉球大学教育学部紀要』第52集　PP.193-199

8）島田俊朗他1999「保育科学生の子ども観及びライフスタイルの変化に関する調査研究」『徳島文理大学研究紀要』第58号　PP.117-185

9）星野英五他1995「保母養成カリキュラムの基礎的研究」『保母養成研究』第13号　PP.79-88

10)『変化する社会と家族』1998槙石多希子他　健帛社　PP.116-118

11）林浩康2000「児童養護施設職員の子ども観」『社会福祉学』40巻vol.2　PP.136-151

12）伊藤保浩1997「教育実習に関する調査研究（その１）」『大分大学教育学部研究紀要』第19号　PP.259-272

13）伊藤保浩1998「教育実習に関する調査研究（その２）」『大分大学教育学部研究紀要』第20号　PP.129-142

14）伊藤保浩1999「教育実習に関する調査研究（その３）」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第21号　PP.71-82

15）鈴木政勝他1998「保育者における保育判断の変化と変化を促したり妨げた

りする要因（1）（2）（3）」『香川大学教育学部研究報告』第Ⅰ部第104号　PP.1-56
16）鈴木政勝他1998「保育者における保育判断の変化と変化を促したり妨げたりする要因（4）」『香川大学教育学部研究報告』第Ⅰ部第105号　PP.61-84
17）鈴木政勝他1999「実習における学生の保育判断の変化（1）（2）」『香川大学教育学部研究報告』第Ⅰ部第106号　PP.1-53
18）鈴木政勝他1999「実習における学生の保育判断の変化（3）（4）」『香川大学教育学部研究報告』第Ⅰ部第107号　PP.25-57